

0. プロローグ～学童疎開について

疎開（そかい）・・・

それは、災害や空襲に備えて、都会の人や物資・工場などを他の場所に移すことです。

戦争が激しくなると、都市部への本格的な空襲に備え、子どもたちを安全な地域に移住させる「学童疎開」が奨励されました。

親戚などを頼って行く「縁故疎開」がうまくすまなかったため、学校や学年ごとに地方の決められた旅館などで集団生活をする「集団疎開」が実施されることになりました。

昭和19年8月、集団疎開の第一陣が疎開地に向けて出発しました。

これらのジオラマは、横浜から疎開した子供たちの手記に基づいて、疎開問題研究会の方々によって製作されました。

ジオラマのいくつかのシーンを見ながら、子供たちの様子を紹介していきます。

1. また会う日まで（昭和19年・夏）

いよいよ今日は疎開地・箱根への出発です。

僕たちは隊列を組んで市電の停留所へと進みました。

まるで自分が戦地へ向う兵士のように、とても晴れがましい気持ちでした。だから、見送りに来ていた母の姿を見ても余裕で手を振っていたのです。

しかし、すしづめになった臨時電車の窓から、お婆ちゃんが手ぬぐいを目にあてている姿を見た時には、・・・胸がいっぱいになりました。・・・「行ってまいります。」

そして市電が滑るように走り出しました。

誰かが泣くと一斉に泣き声は大合唱となりました。

電車の中から窓にすがりつき一生懸命に手を振ります。

集団疎開の始まりでした。



2. 疎開先での授業（昭和19年・夏）

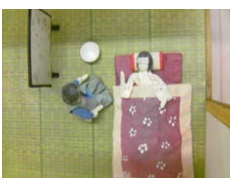
疎開先での生活が始まりました。

限られた場所に多くの子供が集まったため、例えば授業は宿舎の食事用の長い机を使って受けました。備品もないため算数や国語が中心でした。

疎開地に着いてすぐに腹痛を起こす子どもが多くいました。慣れない団体生活によるストレスだったのでしょうか。病院が近くにないので先生方はたいへん困っていました。

近くの温泉には病気や怪我をした兵隊さんが療養に来ていました。

兵隊さんたちと仲良くなりいろいろなお話をしました。兵隊さんたちも子供たちを可愛がってくださいました。



3. 強いからだでがんばろう（昭和19年・夏）

体育の授業は手旗信号でした。

質問に答えるなど、合格しないと宿舎に帰ることができませんでした。

食事やお風呂は近くの旅館に出かけました。

この頃は食糧の配給も少なく、みんないつもお腹をすかせていて、みかんの皮や歯磨き粉を食べたりする人もいました。 _

ご飯の支度はもちろん自分たちでやります。

24時間一緒に過ごすために、いじめられた子の逃げ場はありませんでした。だからみんなそうならないためにどうするか、一生懸命考えていました。

お風呂は少しずつ時間をずらして入りました。広いお風呂も狭く感じたものです。



4. お寺の集団宿泊（昭和19年・秋）

季節は秋です。

毎日寝る前に、横浜に向って「お父さん、お母さんオヤスミナサイ」とみんなで声をそろえて言いました。

虫の声も切なく聞こえ、自然と涙があふれてきます。

宿舎は墓地に囲まれたお寺です。昼間でも薄気味悪かったので、夜中にトイレに行くのは本当に怖かった・・・。縁側を歩くときは外を見ないように・・・見ないように・・・。

友達を起こして連れて行く子もいました。

月に1度くらい親たちが面会にきました。

自分の親が来る事がわかっているときは一日千秋の思いで待っていました。来てくれたときは嬉しくてたまりませんでした。面会に来れない親もいたので、寂しい思いをした子供もいました。・・・親に手紙を書いたりしていました。

5. 薪運び（昭和19年・秋）

薪運びは、僕たちの大事な仕事でした。

火を使う炊事のための薪です。

最初は、さわやかな秋の遠足気分でしたが、山道はかなり急で滑りやすく危険でした。材木も子供にとっては大きな荷物・・・結局みんな必死になって運んでいました。

斧で割るのも慣れないと難しいものでした。

運んできた薪で大釜に湯を沸かします。

下着や洋服についたシラミを退治するためです。

みんなの衣服をお湯で煮ると、シラミの死骸がたくさん出てきました。



6. 横浜に帰るぞ（男の子）、みんなで逃げよう（女の子）（昭和19年・秋）

ある日、女の子たちが集団で宿舎を抜け出しました。先生を困らせようとしたのか、家に帰りたかったのか・・・。みんなそれぞれに野菜を持っていたり、縄跳びをしながら逃げたり・・・女の子の逃げ方は面白いと思いました。男の子は、お金も持たないで走る子が多かった。

駅までは行くのですが、駅員さんはすぐに疎開の子だとわかったようでした。

駅からの電話で先生がかけつけて宿舎に戻ります。

「駅員サンは、どうして僕が疎開の子だって、わかったの？」

家族に会いたい気持ちはみんな同じでした。



7. ドイツ兵と交流（昭和20年・初冬）

この頃、同盟国のドイツ艦が入港し修理や補給を行っていました。半年以上もすぐ近くにいましたので交流が生まれていました。

週末の夜になると先生を目を盗んで、ドイツ人のパーティを覗きに行きました。

豪華な食べ物や飲み物がたくさんありました。

とてもおいしそうでした。

楽器を弾いたり歌を歌ったり、ダンスをしたりしてとても賑やかでした。

「うわぁ、おいしそうなお馳走だね。」



8. 父母の故郷へ（昭和19年・秋）

縁故疎開をした子供たちは、親戚や知り合いの家にお世話になるので寂しいことは少なかったのですが、農家が多く、水汲みや広い庭の掃除などそこでの生活は戸惑いの連続でした。

ある日の朝、学校に行く前にウサギの罾を仕掛けて行きました。帰りに見たら、みごとに獲物がかかっていました。

「とれたよー」「ウサギ！ウサギ！」



9. 焼け跡へ帰宅（昭和20年・秋）

町は焼け野原・・・息をのむほどの変わりようでした。

米軍のカマボコ型兵舎が並び、壊れた建物の残骸が町いっぱい広がっていました。

焼けたトタンで作った、今にも崩れそうな家・・・。ドラム缶のお風呂、むき出しの水道、それでもやっぱり家はいいなー。

家に戻れてホッとしましたが、大変なことになっているのがわかって素直には喜べませんでした。

「お母さ〜ん、お兄ちゃんが帰ってきた」

「お帰り！」

